

重点目標 (めざす姿)	2学期の取組状況	評価1	評価2	今後の改善策 (いつ・誰が・何を・どんなふうに・ねらう子どもの姿)	学校運営協議会による評価・感想
1 組織的な 学校運営	【教職員①86.7%↑】 「チーム学校」が機能するよう、ロードマップや学校評価を活用しながら課題を把握し、運営委員会で主任と入念に打合せて各部会が連携したり、様々な取組を各部会で練り上げてきたりして学校運営を進めてきた。また、GIGAスクール構想をはじめとする各種研修にも積極的に若手メンバーを任せるなど教職員のキャリアアップにも取り組んできた。	A	B	職員アンケートでは「当てはまる」の回答が15.8%向上したが、全体として肯定的な回答が7.1%減っている。コロナ禍で学校行事等が本来の形で実践できないもどかしさを感じながら職務にあたっている職員の様子が垣間見える。それゆえ「取組が検証を経て改善されている」と感じていないと思われる。コロナ禍の現状を受け止め、本来の形ではなくても今できるベストを尽くすことが重要であることを再確認し、職員には自信を持って取り組んでもらいたい。	・全教職員が現状の課題について共有し、これまで以上に取り組んでほしい。特別な状況であり、その中でもベストを尽くしてほしい。 ・自分には良いところがあると子供が思えるようになることを第一に考えていきたい。 ・教師と児童の関係づくりが土台。学校が楽しい・好きと思えることの根拠には、教師の存在が大きい。教師側の関わり方の改善に注力されて嬉しい。子供達もきつと変わる。 ・いじめや不登校・生徒指導など、教員全員でその都度真剣に対応している。その分、時間や人手が足りないなどの深刻な課題ではないか。 ・支援員の適切な配置を。 ・GIGA推進は、働き方改革の一環でもあり、まず、教員が理解と努力をし、効率的な運用と指導を早く進めて頂きたい。
	【児童②89.2%↑】【保護者⑦95.9%↑】【教職員②100%→】 各担任は前学期の自学級の指導のあり方や児童の様子を振り返りながら次学期に学級経営方針を再構築している。児童に関する様々な情報を職員会議や職員終礼で共有し、級外や養護教諭を含め職員全員で全児童を指導するベクトルは強固なものになっている。また、保護者への連絡も密にしながら支援員や関係機関との連携にも心がけている。	B	A	児童の自己肯定感があり高いことに注目し、児童同士の人間関係づくりの改善を目指すべく、まず基盤となる教師と児童の関係づくりを「インプット」「児童への言葉かけのあり方」等の研修をするなど、まず教師側の関わり方の改善に注力した。また、課題が見える児童に関しては、支援会議を経て保護者にも現状を伝え、関係機関とも連携して検査を実施するなど客観的な結果も活用しながら指導・支援のあり方を探ってきた。今後も継続して取組を充実させたい。	・教育界にも急速にDX化が広がっている。新たな危機管理の対応が出現していると考えられるので、常に情報を取り入れてアップデートを。 ・教員のメンタルサポートも気になることである。
	【教職員③73.3%↑】 学校研究をはじめ様々な取組や職員間の情報の周知・共有にクラウドを活用してきた。とりまめとめが省けたり、瞬時に情報を得たりすることができる簡便さは感じていると思うが、不慎れからくる不快感や負担感があると思われる。	B	C	ICT機器を用いた出入に関する情報共有や、コロナ禍で設置せざるを得ない第2職員室の開放で実施しているMeetによる職員会議では、ICT機器の便利さは感じるかもしれないが、不便さを感じている部分がある。時間外の勤務は多いとは言えず、今後ICT機器活用への慣れやコロナ禍の解消が待たれる。	
2 知（確かな 学力の育成）	【児童④88.3%↑】【教職員⑤84.6%↑】 学力調査の結果をもとに、学期ごとに学力向上プランを見直した。またそこから見られる課題を基に国語、算数で重点単元を設定し、授業改善に努めた。ただその検証テストについては、達成率が6割程度であったので、授業でついていた力が生かされていく工夫が必要である。	B	B	3学期も本校の課題を基に国語と算数で重点単元を設定し、授業改善に努めた。また授業でついていた力を検証するテストについても、児童も教師も達成感を実感できるよう、内容を見直す必要がある。	・校訓にもある勤勉性を身に付けるよう今後取り組んでほしい。 ・ICTや英語等は子供たちのこれから人生に必要な・不可欠。小学生の間にかから身近に感じられるよう教育していきたい。
	【児童テスト74.5%↑】【保護者③74.6%↑】【教職員⑥100%→】 きらめきシステムを基に、朝学習では級外が支援に入ったり、放課後の補充学習を取り入れたりと、組織的に基礎基本、活用力の向上に努めてきた。テスト結果としては、全体的に計算力については、漢字の定着が伸びないことが課題である。家庭学習の習慣としては、2学期の家庭学習強化週間の目標学習時間の達成率が81%→85%と上昇している。	B	B	漢字の定着のために覚えた漢字の記憶を保持できるよう、忘れる前に復習する機会を持つ。そのため、まずは「読み」を徹底する。また、「小テストを行った1か月後に同じ問題を宿題やテストに出す。」「前習った漢字を1日3回ずつ繰り返す」等の問題を出す。」「Adリールの活用する。」「など忘れないう工夫をする。家庭学習については、年度初めに各家庭には家庭学習啓発のお知らせを、児童には自学ノートの仕方を配布する。また毎学期の家庭学習・生活見直し週間を継続し、定着を図る。	・漢字に関しては、もちろん、読み・書きは基本だが、意味を理解して、その漢字を使いこなせることで定着になるように感じる。 ・学校での学びと家庭学習をうまくつなげて学力向上を。クラウドはツール。対面声を聴く。コミュニケーションの取り方に工夫を。成功体験は重要。 ・家庭学習や自主勉強で得意分野を伸ばし、意欲につなげてほしい。
	【児童④89.9%↑】【教職員④100%→】 1学期の取組の継続に加え、1学期に体験で見たモデル授業を今度は自分たちで行った。自分たちで体験することによって、一時的ではあったが、多くの児童に意欲の高まりが見られた。また、どのレベルの児童も学びが実感できるよう、ゴールの児童の姿を事前にイメージして授業を計画し、またお互いに授業を見合い感想の交流もあった。授業準備のポイントや新たな発見があった。	A	A	今年度は主体的・協働的をキーワードに取組を進めてきた。意欲の向上は見られたものの、学力調査や児童アンケートなどから、表現力に課題があることが分かった。児童のゴールの姿を明確に授業を計画することはもちろん、そのための授業の実態把握を行う必要があると考える。板書や児童のノートの画像をもとに授業を分析し、ねらいや授業の組み立てを考える際、表現力の育成を意識する。	・検証テストでの達成率が6割のものがあつたが、その原因を明らかに。 ・家庭学習をしっかり習慣づける。努力や忍耐力を身に付ける。 ・クラウドを使って、さらに広がっていく授業のあり方を工夫してほしい。児童一人一人が、興味あることを自由に楽しんで学習する時間など作れるといい。
3 徳（豊かな 心の育成）	【児童⑤88.4%↑】【教職員⑦75.0%↑】 1学期は「クラウドを使うこと」に重点を置いていたのに対し、2学期は「効果的に使うこと」を意識して取り組んできた。児童も職員も各機能について慣れてきており、どのクラスも週に1、2時間はクラウドを使っている。コロナ禍であるが、他者との意見交流など、効果的に使用できていた場面も増えてきた。	A	B	児童は、初めはクラウドを使うことに楽しさを見出していたが、2学期以降は使うことに慣れ、日常的に使用できるようになっている。児童がクラウドを使った学ぶ楽しさを感じるためには、クラウドを通して友達と交流する楽しさや、共同でつくり上げていく達成感などを味わえる授業が必要だと考える。校内研修を通して、さまざまな実践、使い方を確認し、それをサポーター等校内支援体制も工夫しながら児童と取り組んでいけるようにする。	・まずは慣れたが、ホームページ作成やゲームなどつくる楽しさを体験させる。 ・クラウド等の端末やネット環境は、子供達がこれから進む環境で今以上に必要なツールやアイテムとなるが、注意すべきことも多い。教育の場では使い方を以外にメリット・デメリットもしっかり伝えてほしい。
	【児童⑤92.0%↑】【教職員⑦100%→】 2学期は教員と児童との共感の人間関係の育成に焦点を当てた。児童との共感の人間関係の育成についての共通理解、各月の重点目標の設定と取組検証、教師の言葉や広げ深める研修会、共感の人間関係の育成という視点での授業交流等、様々な取組を計画的に実施した。また、特別支援に関しては、個に応じて臨機応変かつ組織的に対応することができた。	B	A	今年度は、児童の共感の人間関係の育成につながる積極的な生徒指導に取り組みすることができた。しかし、1学期の柱である「あつたが言葉」では、児童が必要要素をもつてあつた。2学期の柱である「各月の重点目標の設定と検証」は、教師より達成度の判断に差があつたりと、次年度につなげるための改善点がある。現在の児童の実態に合わせ、効果のある工夫を模索・検討していく。	・他人を思いやる気持ちと学校生活、児童会活動を通して、優しい挨拶のできる子供達になっているように感じられる。 ・学校ならではの「縦のつながり」が状況により作られていくが、高学年からの何らかの発信により、関係性や慣れにも変化が生まれるように思う。 ・教師より達成感の判断に違いがあるのが気になる。
	【児童⑤98.3%↑】【教職員アンケート⑨93.8%↑】 児童会が中心となり、あいさつ運動（根上中学校との連携も含む）、人権週間、しあわせの木の実践など、お互いを大切にできる実践ができた。また、各委員会からの取組も、コロナ禍に留意して実施できている。さらに、清掃活動でも、高学年がリーダーとして他学年の児童と協力して、取り組むことができていた。	B	B	1年を通して各委員会の取組を振り返り、学級や学校の役に立てたことを認め合う場を設け、過程や成果を価値づけていく。また各学年で、次学年へと連続する準備である3学期であることに気づかせ、よりよい学級・学校づくりへの意欲を喚起していく。	・高学年において道徳教育の効果が出ている。 ・地域の中での挨拶は、地域を和やかにしてくれる。子供ができる大きな地域貢献であることを教えていきたい。 ・他人や社会のために何が出来るかが大切。 ・児童一人一人に声掛けを。お互い挨拶や考えを言い合える関係づくり。 ・「あつたが言葉」の取組は、どの学年もわかりやすく効果的である。挨拶は6年生が中心に取り組むもよい。マナー姿でも挨拶でふれあうことで、大人も子供も心があらわれている。
4 体（健やかな 身体力の育成）	【児童⑥87.1%↑】【教職員⑩91.7%→】 年間計画に沿って授業実践を行っている。価値を迫るための問い返しを意識したり、自分の考えを再構築するための時間を確保するためのタイムマネジメントを意識して授業づくりを行った。スポーツフェスタや遠足など体験的な行事と結び付け授業を行った。	B	B	道徳の時間だけでなく、すべての教育活動と結び付け、意図的・計画的に授業を行う。道徳価値の発行や掲示等の工夫も必要である。児童が自分事として捉え議論する道徳の授業づくり研修を積み、道徳の実践力を一層育てていく。	
	【児童⑥91.4%↑】【教職員⑩92.9%↑】 スポーツフェスタでは、児童会の立てたスローガンの基に高学年を中心として全校が目標を持って取り組むことができた。だが、体育チェックシートが上手く活用されていくことがわからず、児童一人一人に合った目標を立てられるような手立てを考えることが課題である。	B	A	担任が今年度の分の体育チェックシートに記録を入れ、来年度、授業の目標を立てることに生かせるようにして、児童が粘り強く楽しく運動ができるようにする。「スポチャレ」の取組を教員の間で周知して、全校が目標を持ってスポーツに取り組むことができるようにしていく。	・コロナ禍の中、感染症対策の重要性について、子供達も認識が高まったと思う。安全教育・予防教育に努め、安全対策の徹底を。同時に、コロナの不安等のメンタル面のサポートにも心配りを。 ・体育チェックシートは、個人で目標を立てていると聞いたが、その日の課題が目標と異なることもあり、達成したとは言えないようである。目標を立て方、方向性が難しい。 ・状況を受け入れられないが、子供の姿を見る機会が少ないのは辛いこと。学年を限定して、分岐が等しい、方法を考えたい。引き続き学習している。 ・感染症対策としても体力づくりが大切なので、運動に注力する。運動能力は、人によって大きく差があり、各自の目標に向かって努力する考え方は、すべてに役立つので推進してほしい。 ・運動会や遠足・修学旅行などで養われる友達や仲間との心育部分の充実を。 ・メディアやSNSの付き合い方について保護者への啓発を続けてほしい。 ・望ましい生活リズム（早寝・早起き）や食事の大切さについて、子供達への意識づけを望む。
	【児童⑥94.2%↑】【教職員⑩93.8%↑】 感染症拡大防止策として各クラスで換気を担当する児童を決め、放送等で換気を呼びかけた。また体育的行事では、児童の接触や怪我を防ぐために職員が工夫した場を作るとともに、適切な休憩場所と水分補給の時間を確保した。	A	A	マスクの着用、朝の検温については、保護者の協力のもと習慣化されてきているが、換気については放送等で呼びかけ、児童及び職員の意識向上を目指していきたい。3学期は体育館での体育活動が中心となるが、とび箱・マット運動など機械運動については、道具の出し入れ、道具の使い分け、接触事故などを防ぐ指導を保健部及び体育委員会等で安全指導と注意喚起を行ってほしい。	
5 家庭・地域との 連携	【児童⑦85.6%↑】【保護者⑫80.0%↑】 生活の振り返りとメディアアンケートを実施し、学校保健委員会やメディアコントロールについて考える機会を設けた。高学年になるにつれて長時間利用の傾向にあること、ルールがあつても守れないときがある児童が多くなることが現状として分かったため、メディア依存にも触れた内容で実施した。	B	B	今年度は家庭学習強化週間に加え、アウトメディアの取組を行ったが、アウトメディアの取組は長期的なアプローチが必要であり、家庭全体での意識の変化が重要であるため、継続して行い、児童・保護者に働きかけていきたい。	
	【保護者⑤68.9%↑】【教職員⑩93.4%↑】 コロナ禍で依然として例年のようなPTA行事が実施できていない状態が続いている。学級委員会が担当する学級懇談会や親子わくわく体験が2年間開催できていない点が保護者にとってもどかしさを感じていると思われる。地域における子どもの挨拶に関するアンケート結果は依然として6割である。児童が地域の人とふれあう機会自体があまりないことにも起因していると思われる。「家庭における挨拶のあり方」に大切にした会話は高い値を維持している。	B	B	10月実施のスポーツフェスタは1・6年生の保護者限定での参観となったが、ほぼ100%の参加率であった。11月実施の授業参観も85.9%と参加率は高く、地域や保護者の教育への関心は高いと言える。学校便りやメール配信、ホームページでの情報公開には努めているが、やはり保護者が学校に来る機会を設定できないことは、保護者・地域・学校にとっても大きな悩みであり、改善策がなかなか見えてこない。	・学校としてのお便りにおいて、全体の様子は理解できている。学年・学級としての現状・課題・先生の実態など、学年懇談会などの場がない分、発信「見える化」がもう少しあるといい。 ・まだまだCSの認知度が低い。少しでも多くの地域の方にかかわってもらおうことが第一である。 ・スポーツフェスタ参観は公平性に配慮を。 ・ホームページの更新が多くてよい。いかに地域の人に見てもらえるかを考えてほしい。 ・PTAもCSもCSもCSの制限でこれまでのように活動できず残念。今は平日の時に連携してできることを行ってほしい。甲申会との連携しながら、子供の成長を見守ってほしい。少人数でも、地域でふれあう活動をするのは大切。
【児童⑥77.0%↑】【教職員⑩100%→】 地域の先生との学習で、知る楽しさを感じたり、学びが深まったと感じている児童の割合が13%減少した。朝や昼の読み聞かせも現状では実施することができず、地域の方との学習の機会が減少したことも要因として挙げられるのではないかとと思われる。	B	B	本年度、何人かの委員の方の入れ替えがあつたが、学校運営協議会への出席率は高く、町会長長等を含め地域の協力体制の充実や学校教育に対する関心の高さが顕著である。図書ボランティアによる読み聞かせやCS・更生保護女性会・民生委員による検温チェックなど献身的な協力にも感謝するとともに地域との良好な関係を継続し、今後も地域の中で育ち、将来的に地域にふるさと愛をもって貢献できる児童を育成したい。		